

「折り紙付き」

「折り紙付き」は「お墨付きを与える」というような意味だが、なぜ「折り紙」なのだろう？ そもそも、読み方は「おりがみつき」でいいのだろうか？ という質問を受けた。

『岩波国語辞典 第7版新版』（平23）によれば、「鑑定保証の折紙のついているもの。転じて、保証するのに足りるという世間の評判」という意味で、「オリガミツキ」と読む。この「折り紙」は、遊びに使う「いろ紙」の「折り紙」とは違う。刀や書画などの美術品を鑑定して、確かな物であることを保証した書き付けのことだ。折って保存されたため、「折ってある紙」で「折り紙」である。

現代でも「折り紙付き」ということばを使ったり、耳にしたりすることはあるが、「折り紙」だけで使われることはほとんどない。かろうじて歌舞伎のセリフで耳にすることがある程度だ。例えば、「折紙もございますれば、好みてさへ有れば、弍百両になりまする代物。」（「お染久松色読販」『鶴屋南北全集 第5巻』三一書房・昭46）などと使われる。この物語の発端となる名刀・吉光の価値について述べるセリフとして「折り紙」が使われている。歌舞伎では「オリカミ」と読む。

「オリカミ」という読みを示す国語辞典は少ないが、『日本国語大辞典 第2版』（小学館・平13）に「古くはオリカミ」と書かれてい

る。また、『新明解アクセント辞典 第2版』（三省堂・平26）には「オリカミ」「オリガミ」両方の読みが掲載されており、「遊びは「オリガミ」という注釈が付いている。古くは、遊びは「オリガミ」、鑑定書は「オリカミ」と読み分けをしていたのかもしれない。

さて、「折り紙付き」について、NHKでは、昭和37年に第508回放送用語委員会で、読みを「オリカミツキ」から「オリガミツキ」に変更した。確かに、「折り紙付き」の場合は、「ガミ」で定着している。『江戸語大辞典 新装版』（講談社・平15）でも、「定評がある」という意味で「オリガミガツク」を示している。江戸時代にはすでに「ガミ」とも読まれていたということかもしれない。

では、「折り紙」だけで使う場合はどうだろう。「折り紙付き」の場合と同様で、「オリガミ」で問題はないだろう。ただ、この語は現代ではあまり使われず、せいぜい歌舞伎で聞くぐらいだ。その時代の読み方をいかして、あえて「オリカミ」と読むという選択もあっていいように思う。例えば、東京新聞の劇評では、「名刀青江下坂の折紙(おりかみ)」と読みがなを付ける工夫がされていた(平27.10.9)。

こうした伝統的な語の場合、これが正解という「折り紙」はなかなか付けにくいものだ。

山下洋子(やました ようこ)